

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成27年度大学入試センター試験の公民科「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）追・再試験は昨年度と同様、大問6問で構成され、「倫理」分野、「政治・経済」分野から、それぞれ大問が3題ずつ出題された。設問は「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から20問で、50点ずつの配点も変わっていない。

「倫理」分野は、リード文が「倫理」追試験の第1、3、4問からの転用である。設問は「倫理」の源流分野の第2問から2問ずつを、「倫政」の第2問（日本思想）に東洋源流、第3問（西洋思想）に西洋源流を配している。「倫政」の独自問題は無く、設問は全て「倫理」からである。

「政治・経済」分野は、第4問はリード文がオリジナルのものであるが、設問は「政治・経済」追・再試験の第1、2、5問からの抽出、第5、6問は「政治・経済」追・再試験の第3、4問からの転用であった。

細部にわたる評価に当たっては、次の点に留意して行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標・内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。
- (2) 基礎的・基本的なものから広い視野に立った思考力・判断力・応用力を問う総合的問題まで、バランス良く配分されているか。
- (3) 「倫理」分野については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済」分野では、科目の性格に鑑み、身近な社会問題についての関心と考察を促すように工夫されているか。
- (5) 各分野の問題配分は適切か。問題の出題方法、配点、難易度は適切か。
- (6) 過去の問題に対する意見や評価を生かしているか。

2 試験問題の内容・範囲等について

第1問 「自他の結び付き」について（現代の諸課題と倫理、青年期の課題、西洋思想）

支えている側の人間が、実は支えられていると指摘する「自立」に関する考察がテーマである。福祉社会において、人間は一人で生きていけるわけではなく、様々な関わりの中で生かされていることを受験者に考えさせる出題である。難易度は標準的である。

問1 標準的な難易度の設問。

問2 「40歳くらいになった自分の将来像」についての調査結果をグラフから読み取る問題である。解答を導くキーワードが示されているが、やや難しい設問。

問3 エヴァ・フェダー・キテイからの引用資料。やや難しい設問。

問4 ブーバーの出題だが、正解を導くのは困難ではない、標準的な難易度の設問。

問5 センの説明に、ロールズとホブズが混在し、やや難しい設問。

第2問 「有限な生をいかに生きるか」について（日本思想・源流思想）

日本人の死生観をたどり、有限な生を有意義なものにすることを問うたリード文である。テーマに沿って、資料も選ばれており、うまくまとめられている。

- 問1 神々への信仰を各時代についてまとめた、標準的な難易度の設問。
- 問2 大乘仏教における、空の思想、唯識思想、仏性思想の理解を問う、やや難しい設問。
『涅槃經』という用語にまず戸惑った受験者もいたと考えられる。
- 問3 読みこなすのに苦勞するが、内容さえ取れば、標準的な難易度の設問。
- 問4 孟子の四徳のうち「義」の芽生え（四端）について知識を問う、平易な設問。
- 問5 塙保己一は細かいが、『古事記伝』を知っているかが問われる、平易な設問。
- 問6 森有礼の『妻妾論』のレベルを正誤判定問題で要求される、難しい設問。
- 問7 本文の趣旨を問う設問。それぞれよく読めば正答できる標準的な難易度である。
- 第3問 「理念と現実世界や人間の在り方との関わり」について（西洋思想・源流思想）
- 理念の考察が現実との対峙につながることを示唆するメッセージのあるリード文である。本試験と比較すれば範囲が狭まった印象を受け、また、細部に至る正確な知識や理解を求める設問もあるが、全体としては標準的な難易度の太問である。
- 問1 愛をめぐるイエスの教えについての理解を問う、標準的な難易度の設問。
- 問2 デカルトの精神論・認識論について、正確な知識と理解を前提に考察しなければ正解を見出すことができない、やや難しい設問。
- 問3 カントの認識論や道徳論に関する正確な知識と理解を前提に考察しなければ正解を見出すことができない、やや難しい設問。
- 問4 弁証法に関する基本的理解ができていれば正解できる標準的な難易度の設問。
- 問5 アは「職業労働を通じて…救済の確信」から、イは『百科全書』という言葉、ウは「世界最初の社会主義国家を建設」という文言から正解が得られる平易な設問。
- 問6 プラトンの理想国家、仏教の五戒、イスラーム共同体、ユダヤ教の律法について、それぞれが理解されているかを問う、標準的な難易度の設問。
- 問7 リード文趣旨の読解力を問う標準的な難易度の設問。①は「古代の思想に立ち戻る」、③は「現実を捉え損ねてきた」、④は「現実がどうであれ」が本文と合致しない。
- 第4問 安全保障をテーマにしたリード文の下で幅広い内容を問う、政治分野と経済分野の融合問題である。リード文には出題者のメッセージが感じられる。設問は知識だけでなく総合的な力を問うものであり、難易度は標準的である。
- 問1 集団安全保障体制に関して、知識に加えて思考力を求めた問題である。難易度は標準的であるが、解答の過程で理解を深めることができる良問である。
- 問2 国連分担金の分担率に関するやや平易な問題である。図を用いた出題であるが、複数の資料を用いて思考力・判断力を問うような工夫を求めたい。
- 問3 身体に関する平易な問題である。
- 問4 経済の自由化政策に関する標準的な問題である。
- 問5 比較生産費説に関して、思考力を問う応用的な問題である。難易度はやや難しい。
- 問6 日本の経済政策に関して、標準的な問題である。
- 第5問 日本の租税と財政をテーマにした経済分野の問題である。設問は基礎的な知識を問う問題と思考力を問う問題や資料問題がバランス良く含まれており、難易度は標準的である。
- 問1 2000年以降の賃金をめぐる動向や出来事に関する平易な問題である。
- 問2 日本の社会保障制度に関する平易な問題である。
- 問3 国庫支出金に関して、知識を基に資料を読み解く応用的な問題である。義務教育費の国庫支出金が減額されたことは細かい知識であり、やや難しい問題である。
- 問4 2000年度以降における日本の国債に関する標準的な問題である。

問5 国民負担率に関する標準的な問題である。

問6 各国における経済政策に関する標準的な問題である。

問7 企業の資金調達に関して、思考力を問う応用的な問題である。平成22年度公示の学習指導要領で重視されている「金融に関する環境の変化」を読み取らせるものであり、工夫された良問であると言える。やや難しい問題である。

第6問 まちづくりにおける規制の在り方をテーマにしたリード文の下、政治分野の幅広い内容について問う問題である。リード文は時事的な内容を含み、読みやすい。基礎的な知識を問う問題が多く、難易度は標準的である。

問1 基本的人権に関する平易な問題である。

問2 環境の整備や保全に関する日本の取組についての標準的な問題である。

問3 住民の直接請求権に関する標準的な問題である。

問4 日本における政策決定に関するやや難しい問題である。

問5 紛争を処理する手段に関する標準的な問題である。

問6 地方自治の本旨に関するやや難しい問題である。基礎的な知識を基に地方自治の本旨における具体例について思考させる良問である。

問7 六次産業化に関する標準的な問題である。時事的な事柄を考えさせる良問である。

3 試験問題の分量・程度等について

「倫理」の分野については、以下の通り。出題の類型は、主に基礎・基本的な概念などについての理解を問うものが11問31点配当から6問15点配当に減る一方、主に基礎・基本的用語や人名を問うものが昨年度5問10点配当から7問17点配当に、主に総合的な思考力・判断力を問う問題は昨年度5問15点配当から6問18点配当に増えた。また、基礎・基本的用語や人名を問う問題については単純に語句を問うのではなく、文章で問う問題が増加している。

分野ごとの配点は「現代の諸課題」14点、源流思想10点、日本思想13点、西洋思想13点と、源流思想の配点が若干低くなっている。問題の程度については、第1問・第3問がそれぞれ標準的な難易度で、第2問がやや難しく、全体としては標準的な難易度であった。

「政治・経済」分野については、以下の通り。問題の分量・程度は、四つの観点から分類した結果、おおむね適切であったと考えられる。教科書に基づく知識を問う問題は、昨年度の13問33点から13問30点となった。教科書に基づく知識を使って思考力や応用力を問う問題（第4問の問1・問5、第5問の問5・問7、第6問の問6）は、昨年度の3問8点から5問14点に増加した。時事的な問題（第6問の問7）は昨年度の2問4点から1問3点に減少したものの、一昨年度指摘した時事的な問題の出題については継続された。資料を用いて分析力等を問う問題（第5問の問3）は1問3点と昨年度と同じであった。また、基礎と応用での分類では、基礎が17問41点、応用が3問9点であり、基礎的で平易な問題が多い。また、各分野の問題配分及び配点については、政治分野が9問22点、経済分野が11問28点であり、本試験同様経済分野に重点が置かれている。

4 試験問題の表現・形式等について

今年度の設問数は昨年度同様大問数6、設問数39で変更はなかった。大問は第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。設問数および解答数は「倫理」分野が19問、「政治・経済」分野が20問とほぼ同数であり、配点は各分野とも50点ずつであった。

「倫理」分野では、設問形式として、知識理解を問うものから思考判断を求めるものまで「倫理」

で学んだ様々な学力を適正に判断できる設問がバランス良く出題されている。また、第1問の間3、第2問の間3にある資料問題は、リード文の各テーマに沿った内容となるように工夫されていたと感じる。なお、三つの正誤の判定を求める問題は昨年度と同じく4題であった。

「政治・経済」分野では、政治や経済の諸課題について受験者に思考と理解を促す出題者の意図等が随所に感じられる。知識を活用して図を読み解く思考力や判断力等を問う良問もあった（第4問の間5、第5問の間3・間7）。一方、リード文の内容との関係性が薄い設問も一部に見られた。リード文の内容を更に生かした設問となるよう留意していただきたい。

5 要 約

(1) 「倫理」分野

学習指導要領に定められた内容から幅広く出題され、総合的な力を問う良問や、意欲作も多く、倫理の問題として評価できるものである。高校での学習の現状や生徒の動向、更に教科書での扱いなどを踏まえて、基本的事項から発展・応用的な問題まで幅広く、学習の成果がより良く反映される出題を続けていただくようお願いしたい。

(2) 「政治・経済」分野

学習指導要領で求められている内容に沿って、広い範囲から出題されている。全体として、教科書での学習を基本とした出題となっている。

学習指導要領に基づく基礎的・基本的知識や概念の理解を問うことに重点を置きつつ、時事的な問題や資料を用いて多面的・多角的に考察させる良質な問題の作成を、今後とも期待したい。